## 心に残る映画

# 『みえない雲』

2006年／ドイツ／グレゴール・シュニッツラー監督作品

## 身近で見聞きした光景が次々と原発の恐怖・危険性をリアルに表現

会員　青龍 美和子（64期）

『みえない雲』
発売・販売：ハピネット
価格：3,990円（税込）

本作は，1986年のチェルノブイリ原子力発電所での大規模な放射能漏れ事故後の1987年にドイツで発表され数々の文学賞を受賞したベストセラー小説を2006年に映画化した作品である。私は，某カタログ雑誌の付録DVDとなったものを，定期購読している事務所の先輩から借りて観たところ，なかなかの衝撃を受けたので紹介したい。

主人公は，原発から約80㎞の距離に位置する小さな街に暮らす女子高校生のハンナ。同じクラスの男子生徒エルマーに恋をし，想いが通じ合った瞬間，ABC警報（核兵器・細菌兵器・化学兵器による攻撃に対する警報のことで，ドイツでは有事の際に鳴らすことになっているらしい。）が鳴りだし，街中がパニックになる。ハンナは恋人と離ればなれになり，幼い弟が１人留守番している自宅に戻ると，周辺には屋内退避を指示するアナウンスが流れている。しかし，近所の住民たちは皆車で逃げ出し，弟と２人で自宅に取り残される。母の勤務先は原発の直近。不安と恐怖から，とにかく逃げようと自転車で駅に向かうが，道路は大渋滞で駅にも人があふれている。必死で逃げる中，黒い雲が迫ってくるのである。

私は，2011年の福島第一原発事故の被害救済を求める弁護団に参加しており，本年３月11日に集団訴訟を提起した。南相馬市原町区で福島第一原発から半径20㎞圏の境界よりギリギリ外側の位置に住んでいる方に聞き取りをすると，事故直後，屋内退避の指示を受け自宅に留まっていたところ，自宅近くの道路には立ち入り禁止の看板が立てられ，隣近所はみんな逃げて行ったと言う。自分らにはどこへ逃げろなどという指示はなかったが，情報が入らず不安になり，事故から５日後には行く宛てもなく着の身着のまま避難したという。事故直後の現地の状況や被害者がとった行動について，まさに重なるものがある。

また，映画では，事故後，被曝したハンナは特別病棟に入院し，恋人エルマーと再会するも彼の父親から交際を反対され，事故前には仲の良かった友人と街でばったり会っても，よそよそしく接せられるなどの差別を受ける。ラジオでは原発に近い範囲についての一部解除のニュースが流れる中，街を行き交う人々は原発事故などなかったように日常生活を送っている。身近に見聞きしたような光景が映画に次々と登場するのである。

ドイツでは，福島原発事故の５年前から，チェルノブイリでの原発事故を教訓にこのような原発の恐怖や危険性をリアルに表現する作品が発表され，政治も脱原発の方向に進み，福島原発事故後もその方向性は一層明確になっている。

日本ではどうだろう。福島原発事故後も，政府は一度は原発ゼロを目指した方針も見直すとし，原発再稼働，新設，輸出にも積極的である。

しかし，毎週金曜日の首相官邸前での抗議行動も続いており，本作を付録として読者に配付する通販会社も現れている。私たちが起こした集団訴訟も，こうした運動の流れと一体となるものである。日本はまだこれからだ。